



特集 豊かな水辺環境を取り戻すために

② 巻頭インタビュー：まことさん

④ 特集：豊かな水辺環境を取り戻すために

⑩ CLOSE UP：大山千枚田

⑫ サポーターインタビュー：テラサイクルジャパン合同会社

⑭ 地球環境基金のサポーター

⑮ 第3回全国ユース環境活動発表大会の報告



第3回全国ユース環境活動発表大会 出場高校(12校)

環境大臣賞

- 岩手県立遠野緑峰高等学校
草花研究班
ホップ和紙開発プロジェクト
～ホップ葉の新たな可能性にける～

環境再生保全機構 理事長賞

- 愛知県立佐屋高等学校
羽ばたけコールドック農法研修班
世界最小のアヒル(コールドック)が地球を救う!

国連大学サステイナビリティ 高等研究所 所長賞

- 和歌山県立田辺高等学校
田辺中学高校生物部
鳥の巣半島の生物多様性を守ろう

高校生が選ぶ特別賞

- 徳島県立徳島商業高等学校
ビジネス研究部
カンボジアの食の安全を守ろう!
希望の工場建設プロジェクト

先生が選ぶ特別賞

- 群馬県立利根実業高等学校
生物資源部(イノシシ)
イノシシ侵入防護研究と地域への普及活動

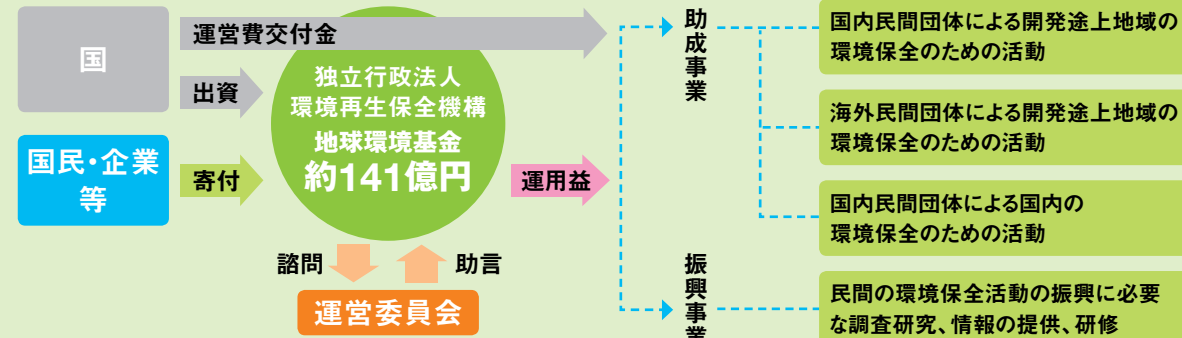
以下、優秀賞

- 佐賀県立佐賀商業高等学校
さが学美舎
SAGA 藻わたしたちの未来
- 山陽女子中学校・高等学校
地歴部
瀬戸内海の島嶼部の海洋ごみ問題に目を向けて
- 奈良県立御所実業高等学校
「生物多様性の保全」研究班
生物多様性ならプロジェクト～田んぼの水族館～
- 富山県立中央農業高等学校
小動物研究班
とってもかわいい獣害対策
～地域の環境保全をめざして～

- 千葉県立鎌ヶ谷西高等学校
鎌西1年2組
地域を巻き込み!「服のチカラ」プロジェクト
- 青森県立久井農業高等学校
TEAM FLORA PHOTONICS
生物による水質浄化システム
「バイオエンジン」の開発と普及
- 北海道士幌高等学校
環境専攻班
士幌の原植生 カシワ林を後世に伝えるために



環境再生保全機構は、国の出資金と民間からの寄付金により「地球環境基金」を設け、その運用益と国からの運営費交付金により、国内外の民間団体(NGO・NPO)が行う環境保全活動へ支援を行っています。



寄付メニュー のご案内

読み終わった本やCDで環境保全に貢献しませんか?
本やCDの買取金額が寄付金となり、NGO・NPOの環境保全活動に役立てられます。

本de寄付

- ① 読み終わった本やCDをダンボール箱につめる
- ② 「本de寄付」に申込む
- ③ 無料でお引き取り
- ④ 買取金額が寄付される

お送りいただけるもの
●単行本、文庫、新書
●マンガ本
●CD・DVD
●ゲームソフト など

ダンボール箱につめる
ダンボール箱のご用意をお願いします。お引き取りは、本は30点上、CD・DVD等は5点以上からとなります。

ホームページ、TEL、FAXから申し込みください。

ご指定の日時に、配達業者が無料で集荷に伺います。

寄付金額を記載したお礼状を交付します。

地球環境基金 便り

第 45 号 2018年(平成30年)9月1日号

表紙写真



水辺の環境保全を担う次世代を育成
島根県益田市で水辺の環境保全活動に取り組むアンダンテ21。子どもやその親世代が地元の水辺に親しむ機会が減っていることから、カヤックや海の生物採取体験などのイベントを通じて親水性を高め、水辺の環境保全を自主的に担う次世代を育成しています。

イベント情報

地球環境基金は、下記のイベントに出展します。ぜひお越しください。
◆グローバルフェスタJAPAN2018
日時:2018年9月29日(土)30日(日)10:00～17:00
場所:お台場センタープラザ(シンボルプラザ公園内)
◆エコプロ2018
日時:2018年12月6日(木)～8日(土)10:00～17:00
場所:東京ビッグサイト(東ホール)

編集後記

特集の岡田光正さんの取材で「地球環境基金はさまざまな活動の情報を共有する役割がある」というお話がありました。今年度も207件の多様な助成活動が決定しました。本誌で紹介できる数は限られますが、国内外で活躍する団体や活動を共有できればと、改めて思いました。

発行/独立行政法人環境再生保全機構 地球環境基金部基金管理課
URL:https://www.erca.go.jp/jfge/ E-mail:c-kikin@erca.go.jp
〒212-8554 神奈川県川崎市幸区大宮町1310番 ミューザ川崎セントラルタワー8F
TEL:044(520)9606 FAX:044(520)2192 編集協力/株式会社東京法規出版



独立行政法人 環境再生保全機構



まことさん

自然に近い暮らしで自分を見つめ直し、
自分も自然の一部であることに気づいた

シャ乱Qのドラマーとして活躍される一方で、趣味のアウトドアが高じ、今や自然に関するイベントのナビゲーターや、環境省「つなげよう、支えよう森里川海」のアンバサダーを務めるようになったまことさん。現在は、山梨県と静岡県にも生活の拠点を置きつつ、仕事で東京に通う生活をしているまことさんに、「自身のこだわりが詰まった山梨県の「自宅」で、自然に近い生活で見えてくることや意識の変化について聞きました。

自然に触れて感じた、
こころの安らぎ

レコーディングやテレビの収録って、ほとんど窓がなく遮音されたスタジオでやるんです。シャ乱Qとしての活動が忙しかった時は、自然からシャットアウトされた環境にいるのが当たり前前の生活でした。きっとその反動だったの

でしょうね。僕はそのころ、旅に出ることが増えていきました。キャンピングトレーラーで国内を回ったり、海外の国立公園へ行ったり…。外界から遮断されたスタジオを飛び出し、自然に触れることで、こころが安らいでいくのを感じました。今考えると、この時期の旅の経験が「自然っていいな、自然の近くで暮らしたいな」

と考えるきっかけだったと思います。都会の生活では当たり前と感じていた人口密度の高さや自然の少なさに、少しずつ違和感を覚えるようになり、都会に暮らしていることが自分にとっていかに不自然なことがわかってきました。自然と触れ合う旅が、都会の暮らしで擦り切れていた自分を見つめ直すきっかけをくれたんです。

Makoto

1968年大阪府生まれのミュージシャン。1992年に「シャ乱Q」のドラマーとしてデビュー。数々の楽曲を手がけるほか、テレビ出演やアウトドア雑誌にて執筆活動も行っている。近年では、里山里海の魅力を伝える「SATOYAMA SATOUMI movement」への参加や、環境省「つなげよう、支えよう森里川海」のアンバサダー、移住先のひとつである静岡県沼津市の第24期「燦々ぬまづ大使」を務めている。

森の中と海の近く、
そして都会の3か所暮らし

そういう経緯もあって、「東京を離れて自然に近い場所に家を建てよう」というのは、ごく自然の流れでした。妻（フリーアナウンサーの富永美樹さん）と二人で自然の近くで暮らせる土地を探しに行き、15年から山梨県の富士山の麓に住み始めました。この土地にした理由は、自然と人間がうまく共存できている環境があり、車を使えば東京まで一時間半程度で行けることです。

ところが16年にテレビ番組の企画で、突然、静岡県沼津市に3か月間移住生活を送ることに。移住先の沼津市戸田地域は、山梨とは全く違う漁港を中心にした小さな

集落です。正直、不安もありましたが、いざ暮らし始めてみると、海の景観は素晴らしいし食べ物もおいしい。そして何より地域の人の温かさが本場にありがたく、どんどんと愛着が湧いていきました。結局、3か月の番組企画終了後も家をそのまま借りて生活することにしました。

そして今、山梨県と静岡県、仕事の拠点である東京の3か所で生活しています。富士山の麓はこもる場所。自分を省みる場所として最適です。薪を集めたり、草むしりをしたり、時には木を眺めながら過ごしたりと、自分の時間を満喫して癒されています。戸田は外に向かって開放する場所。地域の人たちとのコミュニケーションを積極的にとりながら生活しています。生活拠点の3か所にそれぞれの役割があり、ちょうどいいバランスで使い分けています。

自然に近い暮らしで、
無駄を出さない生活に

自然の近くで暮らしてみても、環

境に対する意識は大きく変わりました。移住するまでは、土が何からできているか知らなかったです。でも、そもそもそんなことを考えたこともありませんでした。都会では当たり前のようにゴミとして捨てていた野菜クズや食べものの残りが、ここでは自然の中に放っておけばいずれ土に戻ります。自然と無駄を出さない生活を意識するようになりました。また呼吸も同じで、自分たちの吐く二酸化炭素を使って植物たちが酸素をつくり、それをまた自分たちが吸い、生きている。〃持ちつ持たれつ〃のいい関係があります。こういうことを考えていくうちに、自分自身も自然の一部だということを実感するようになりました。

その一方で、環境問題については、まだ語れるところまできていません。気温の上昇やそれに伴う生息する生き物の変化などは、もっと長期間暮らさないと見えてこないもので、今、自分の体で検証しているところです。実際に自然に近いところで生活することで、見えてくる環境問題があると思います。



まことさんがご自身で設計した薪小屋。ここに座って自然を感じるのが癒しの時間

豊かな水辺環境を 取り戻すために



生態系を回復させようと人の手による植え付けが進むアマモ。アマモは沿岸域の海洋生物の産卵・生育の場所としての機能や水質浄化機能があることから「海のゆりかご」とも呼ばれる

生命の根幹である「水」。四方を海に囲まれ、世界平均と比べて降水量も多い日本は、古くから水辺に親しんで暮らしてきました。しかし高度経済成長の時代には水質汚染が深刻化し、人々が水辺から離れてしまった時期もありました。今、日本の水辺環境はどうなっているのか。また今後求められる水辺環境の保全活動とは。放送大学理事・副学長の岡田光正教授に聞きました。

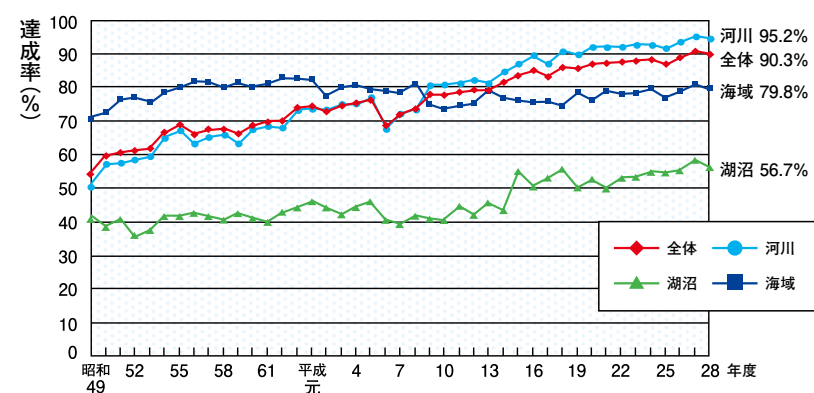
水質は改善したものの 生態系はまだ戻らず

「今、日本の水辺環境はどうなっているのか」。それは簡単には答えられない問題です。ひとことに「水辺」といっても、海か川か、湖か干潟かなどさまざまです。また環境を評価するにあたって、その水辺の景観を評価するのか、生物のすみかとしての機能を評価するのか、あるいはレクリエーションの場所として評価するのか、それぞれの水辺の何を重視し、どう利用したいのかによって、評価は全く違って来るからです。

しかし「水質」に限るならば、近年かなりきれいになってきているといえます。有害物質による汚染は著しく改善され、全国的にほぼ問題のない状況になってきていますし、BOD^①とCOD^②の数値を見ても、水質の改善は科学的に裏づけされています（表1）。高度経済成長期の公害が社会問題となった時代と比較すれば、水質が格段に良くなったことは間違いありません。では水質が改善されればそれだけでいいのかといえば、それは違います。水質が良くなっても、そこにまだ植物や生き物がいません。つまり今の日本

の水辺環境は、水質は改善したものの生態系が戻っていない状態だといえます。魚などの生き物が戻るためには、「藻場^③」のような生き物のすみかとなる場所が必要です。海辺は藻場ができてはじめて生き物が戻り、生態系が維持されていきます。護岸工事等で埋め立てってしまった場所以外であれば、水質が改善されれば自然にアマモの種な

（表1）環境基準達成率の推移（BODまたはCOD）



出典：平成28年度公共用水域水質測定結果（環境省 水・大気環境局）

どが流れてきて藻場が再生され、生き物が戻ることが期待できます。ただしまだまだ時間が必要です。それを広範囲にわたり人工的に再生するには莫大な予算も必要になります。

一方で、水辺に親しむ人が減ったという問題については、実はそんなに心配していません。確かに水質汚染が深刻化していたときは、臭いものには蓋^④とばかりに人々が目を背けていた頃もありましたが、水がきれいになれば、人はまた水辺に戻ってくることでしょう。

自然相手の活動は 失敗もつきものと心得る

先述のとおり、水がきれいになれば、藻場はある程度は自然に再生します。しかし時間がかかることもあり、今、全国で人の手によって藻場を再生する活動が行われています。ところが、残念なことに全てがうまくいっているわけではなく、失敗する例もあります。実際に私もアマモ場の再生事業に取り組んだことがあり、そのときはうまくいったのですが、その成功例と同じ手法を別の海域でやってもうまくいきませんでした。相手は自然であり、それぞれの現場によって条件が違います。「植えれば再生する」という簡単なも

のではないので、その地域や海域をよく知った上で取り組むことが大切です。また「そんなに早く結果が出る取り組みはない」ということも知っておくべきでしょう。自然の状態でも、ある年は藻場が50ヘクタールあったのに、その翌年は20ヘクタールになったなどと変化することはよくあります。またアマモを植えた数日後に台風が来て、全て流されてしまった、ということも起こります。一度の取り組みだけで、成功した、失敗した、と判断することはできません。自然相手の活動は、長い目で見ることも大切です。

「湾」単位ではなく より小さな地域で考える

今、水辺の環境対策の考え方が変わってきています。これまで、例えば「東京湾」「瀬戸内海」というように、比較的大きな海域を1エリアとして議論してきました。ところが、「東京湾」といっても千葉寄りの東京湾と

これからは地域が
「どんな水辺にしたいのか」を決め、
地域が主体となって
環境保全活動を進めていく

横浜寄りの東京湾では、その環境特性も違えば、住民が海に期待するものも違います。そのため近年では、湾のより大きな単位で考えるのではなく、もっと細分化した地域ごとに環境を議論し、目標を決めていこうという方向に変わってきています。

そうなったとき、主役になるのは地域住民であり、行政であり、地域のNPO・NGOです。これからはその地域で生活し、地域を熟知している人たちが、身近な水辺をどうしていきたいのか考え、行動することが求められているのです。

今後、ますます地域の環境NPO・NGOの力が必要とされてくる場面が増えてくると思います。行政と協力することはもちろん、その地域の昔の姿を知っている高齢者や、海を生業とする漁協の人たち、そして地元の大学などとも協力して、自分たちの地域の水辺をどうしていきたいのか考え、活動してほしいと思います。

ECO WORD

やさしいエコワード講座

- ① BOD**……生物化学的酸素要求量。水中の有機物が好気性微生物の働きによって分解されるときに消費される酸素の量のこと。河川の有機汚濁を測る代表的な指標。
- ② COD**……化学的酸素要求量。水中の有機物を酸化剤で酸化した際に消費される酸素の量のこと。湖沼、海域の有機汚濁を測る代表的な指標。
- ③ 藻場**……沿岸域の海底でさまざまな海草・海藻が群落を形成している場所。種子植物であるアマモなどの海草によるアマモ場と、藻類に分類されるコンブ、アラメといった海藻によるコンブ場、アラメ場などがある。海中の様々な生物に隠れ場所・産卵場所などを提供し、窒素やリンなどの栄養塩を吸収して光合成をし、水の浄化や海中に酸素を供給することで沿岸域の生態系を支えている。

放送大学 理事・副学長
学習教育戦略研究所長
岡田 光正さん

環境庁国立環境研究所主任研究員、東京農工大学工学部助教授、広島大学工学部教授を経て、同大学院工学研究科長・工学部長、同大学の理事・副学長などを歴任し、現職。また環境省中央環境審議会委員（水環境部会長、土壤農業部会長、瀬戸内海環境保全小委員会委員長、環境保健部会長）を務める。専門分野は環境化学工学、生態工学。



主な活動

★体験型環境教室

29年度は4回実施
・カヤック・生物採取体験 1回
・釣り教室 3回
参加人数 **149人**

★学校での水環境学習

29年度は小学校2校2学年、高校1校で**12回**実施
授業を受けた小学生が、清掃活動や体験教室に**50人**以上自主的に参加

最終目標は地域住民が
主体の環境教育システム

私たちは全ての活動を通じて、地

の時間」で地域の自然環境を取り上げる学校が多く、当団体が講師の依頼を受けます。私たちも地域の環境の未来には次世代の環境保全意識の向上が欠かせないと考えているため、できる限り依頼に応じます。一般向けイベントは一回限りがほとんどですが、学校は一年を通じて複数回授業があるため、フィールドでの生物採取、漁業見学、ごみ調査など様々なプログラムを実施。地域の環境問題に絡めたゴールを設定し、そこに向けて児童が自発的な問題提起や解決方法を発見できるよう、先生方と綿密な打ち合わせや中間評価を重ねてプランを組んでいます。



小学生のフィールド学習。毎回、スイッチが入ったかのように集中した児童が何人か出てくるという

域住民や行政との協働に力を注いでいます。環境教室や学校教育においてもできるだけ地域の人や漁業関係者に関わってもらおう心がけています。そのかいあって、私たちが定期的を実施している河川清掃には、学校、自治会、飲食業組合、企業、行政など10団体以上、200人以上が協力してくれるようになりました。また学校教育で漁港見学や漁具についての講義などをしてくださる漁師さんは、最初はあまり積極的ではなかったものの、今では年度初めに「今年はやらののか」と気にかけてくれるようになりました。最近では、当団体を介さずに、学校が地域の人に直接講師を頼むこともできるようになっています。

イベントにしても学校教育にしても、地域内の全てを当団体でやるのは不可



特定非営利活動法人 アンダンテ21

〔活動名〕協働と次世代育成をめざした
益田市水環境保全プロジェクト

島根県益田市 <https://www.andante21.org/>



理事長
渡邊 勝美さん

「森～川～海」がつながる豊かな環境を
地域の宝として次世代に継承するために地域の未来のために
次世代への教育に尽力

市の海岸は景勝地としてはもちろん、釣りや海水浴などのレジャーにも適し

私たちは平成15年から島根県益田市で環境保全活動に取り組んでいます。当初は市内を流れる一級河川、高津川流域を中心に活動。22年度から5年連続で高津川が国土交通省水質調査の日本一になるなどの成果を得ました。そして今、私たちが力を入れているのが、海岸線一帯での活動です。市の海岸は、高津川などの川が森から供給される上質な砂や栄養を河口域に運ぶことで、豊かな生態系が育まれています。「森～川～海」が繋がったこの環境は、地域が誇る自然環境資本であり、地域の環境保全を考えるうえで川と海を切り離すことはできないと考え、活動の場所を広げました。



釣り教室の様子。まず海岸の清掃をした後で、釣りにチャレンジする

た素晴らしい環境ですが、残念ながらそれをまちづくりに活用できていません。また次世代への教育や継承システムが未構築なことも問題です。そこで私たちは、昨年度から地域の親子を対象にした体験型環境教室を企画しています。体験の内容はシーカヤックや魚釣りなど様々ですが、全てに共通するのが「自分の遊び場をきれいにしてから」という考え方で、必ず清掃活動をしてから体験を始めます。海岸の地形によってごみの傾向が違い、小さなプラスチックごみを中心に集めることもあれば、200kg以上のごみが集まることもあります。終了後のアンケートで「地域の水環境への関心が増した」と回答した人が9割を超え、イベントが環境を考えるきっかけになっている手ごたえを感じます。

また学校での水環境学習にも力を入れています。小学校の「総合的な学習

小学校で授業を
依頼している
益田市立安田小学校 教頭
田中 茂秋さん
に聞きました



海や川に対する情熱が子どもに伝わる授業

以前から「地域の海や川について学ぶにはアンダンテ21さんをお願いしたい」という評判を聞いており、平成27年度から授業をお願いしています。

アンダンテ21のみなさんは本当に海や川に対して情熱を持っており、それを自分の言葉で伝えようとしてくださるので、子どもたちが自然に話に引き込まれます。また教員では知らない知識や、実物を見たり触ったりできることが、子どもたちの興味や関心を強くひくようです。

学校も児童が身近な自然環境を学ぶことは非常に重要だと考えています。しかし教員が独自に調べるところから始めるには、準備に時間がかかりすぎます。そこでアンダンテ21さんには、学校が計画した学習を深めるための人や物のコーディネートの第一人者になっていただき、学校と地域の方々、行政、その他関係する機関との橋渡しをお願いしたいです。そして小学生に多くの人と出会う場をつくっていただき、その方の生き方や情熱が伝わるような授業を期待しております。

水辺の環境保全活動に特化した助成金「LOVE BLUE 助成」

地球環境基金では、企業等のご寄付を直接助成に充てる「企業協働プロジェクト」を実施しています。その第一号として27年度からスタートした「LOVE BLUE 助成」(※)は、一般社団法人日本釣用品工業会より寄付された資金をもとに、水辺の環境保全活動に取り組む団体に助成するものです。

日本釣用品工業会は「LOVE BLUE ～地球の未来を～」をスローガンに、「釣りで自然を汚さない」から「釣りが自然を再生させる一助になる」ように環境への意識を高め、世界に誇る「水辺の環境保全」を志向する社会貢献事業を実施しています。

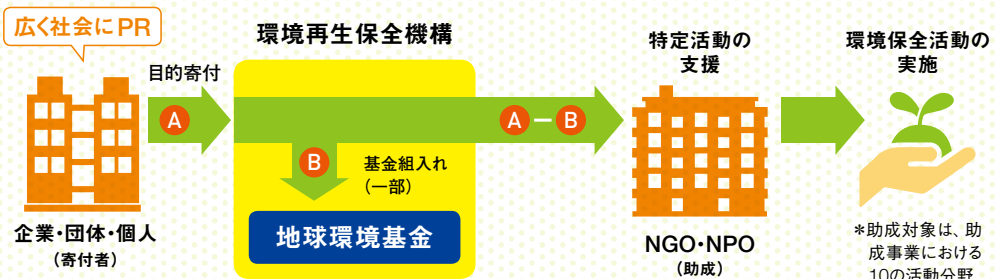
(※)平成27年度から地球環境基金との企業協働プロジェクト「つり環境ビジョン助成」が始まり、平成29年度から「LOVE BLUE 助成」に名称変更しました。

★日本釣用品工業会HP <http://www.jaftma.or.jp/>



地球環境基金企業協働プロジェクトの仕組み

企業等(企業・団体・個人など)のご寄付を直接助成に充て、当該企業等からの拠出によることを明らかにして助成する、新しい仕組みです。



能です。残念ながら、依頼を受けても時間が足りずに断ることもあります。先述の学校が地域の人に直接講師を依頼するような、地域住民が主体となっ

た地域の環境教育システムが構築されていくことが私たちの最終目標だと考え、今後も地域を巻き込んだ活動を進めていきたいです。



漁協等の協力により底引き網漁船で海底ごみを引き揚げ、分別する。10年以上前に製造された缶などが回収されることも

船に乗り、海底ごみの回収作業を船上から見学。その後、引き揚げたゴミの分別作業を体験します。また同時に「海ごみの現状」「生物多様性」などをテーマにした講演やワークショップも行います。

回収したごみを目の当たりにした子どもたちからは「海底にあるはずもないプラスチックや金属が引き揚げられ衝撃だった」「分別して改めてごみの多さを感じた」などの声が挙げられます。実際のごみを見ることで、説明するまでもなく問題の大きさを実感し、さらに分別作業でそのほとんどが自分たちの生活圏から出ていることも認識するため、ごみのポイ捨て防止など環境保全意識の改善につながります。

これまでの活動から、見えないものを「見える化」し、視覚に訴えることが、参加者の意識を変える上で非常に有効だと感じています。今後は関心が

主な活動

●里海シンポジウムを開催

29年度は**220**人が参加し、環境大臣が講演を行った

●海ごみ回収体験学習

29年度は2回開催し、**92**人が参加

回収したごみの量 **80kg**
(29年度イベント当日も含めおよそ一週間分)

〈内訳〉プラスチック33.6kg
スチール缶18.4kg(119個)
ペットボトル16kg
ビン7.9kg(60個)
アルミ缶3.1kg(99個) / その他1kg

低い人でも参加できる、楽しみながら学べる要素を取り入れた催しも考えていきたいと思っています。そして近隣県も含め、瀬戸内海沿岸でこうした活動を広げていくのが目標です。

環境問題は、私たちが普段何げなくしている行動とつながっています。現実を見て、想像力を働かせ、行動を変えられることで、真に美しい瀬戸内海を次世代に引き継ぎたいと願っています。

特定非営利活動法人
グリーンパートナーおかやま

〔活動名〕海ごみから流域環境を考えるプロジェクト

岡山県岡山市 <https://green-partner.jimdo.com/>



理事長
藤原 瑠美子さん

見えない海底ごみを「見える化」し
瀬戸内海沿岸の市民の意識を変えていく

瀬戸内海はかつて赤潮が多発するなど危機的な状況にありましたが、事業者等に対する規制が強化されたことで、最近ではほとんど見られなくなりました。とはいえ、水質改善や生物多様性保護の面では必ずしも改善されたとはいえません。その原因は「ごみ」です。

瀬戸内海の海岸や海面、海底には、瀬戸内海に注ぐ川の流域からの生活ごみが流入しています。特に海底ごみは約1万3000トン、25メートルプールの水約43杯分(※)も堆積していると推計され、さらに増え続けています。

瀬戸内海をはじめ全国のお海では、海岸やその周辺のごみ回収や清掃活動は活発に行われているものの、残念ながら海底ごみの回収を実施しているところは多くありません。そもそも海底の様子は目に見えないため、海底に大量のごみが堆積していることはほとんど知



220人が集まった昨年の里海シンポジウム。パネルディスカッションの様子

まずは「海底ごみ」の
存在を知ってもらう

人の目に触れにくい海底ごみの問題を多くの市民に知ってもらい、日常生活で何げなくごみをポイ捨てし、用水路や河川を通じて海に流出する、それが現状です。 ※幅12メートル、深さ1メートルの想定

「自分の目で見れば問題の大きさを実感できる」

当団体では、9年前から毎年「海ごみ回収体験学習」を実施しています。海の環境に興味のある小学校3年生以上であれば誰でも参加できます。場所は瀬戸内海沿岸で、まず底引き網漁

シンポジウムで
ご講演された
九州大学 応用力学研究所 教授
磯辺 篤彦さん
に聞きました



研究者と市民、行政をつなぐ役割に期待

グリーンパートナーおかやまさんとの出会いは、2年前、依頼を受けてシンポジウムで海洋プラスチック汚染の研究を紹介する講演をしたときです。大勢の一般市民の方々や、地域行政や政治家の方々も足を運びシンポジウムを主宰しておられ、多様なステークホルダーを巻き込んだ活動ぶりが印象的でした。またシンポジウムだけでなく、実際に海岸での海ごみ調査清掃活動などを活発に行われているようで、とてもバランスのとれた良い活動がされていると思います。

私たち研究者は、研究成果を英語論文にして公表し、世界の同業者に評価していただくことが仕事です。しかし海ごみ問題は、行政や市民にいち早く研究成果を届ける必要があります。研究者以外はアクセスしにくい論文だけでは、私たちの成果が実際の現場になかなか届かないというもどかしさを常に感じるところです。グリーンパートナーおかやまさんのようなNPO・NGOには、研究者と市民や行政をつなぐ役割を今後とも大いに期待しています。

平成30年度は、誌面で紹介した2団体のほかに、下記の団体が「LOVE BLUE 助成」を受けて活動しています。

団体名	所在地	活動名	団体ホームページ URL
(特非) 美ら海振興会	沖縄県那覇市	沖縄慶良間諸島のチービシエリアのサンゴ礁再生環境づくりプロジェクト	http://www.churaumishinkokai.com
(特非) くすの木自然館	鹿児島県始良市	鹿児島湾奥地域における湿地帯保全活動	http://kusunokishizenkan.com/
次世代のためにがんばろ会	熊本県八代市	八代海河川・浜辺の大そうじ大会と干潟保全に向けた青少年ワークショップ	http://www.ganbarokai.jp/
やったろうde高島	長崎県長崎市	珊瑚ツーリズムの創造	http://nagasakist.web.fc2.com/de/
(一社) ふくおか FUN	福岡県福岡市	福岡の海における生物多様性および水中環境保全のための活動	http://fun-fukuoka.or.jp/
(特非) 神戸海さくら	兵庫県神戸市	須磨海岸における地域住民および海岸利用者の参加型清掃活動とマナー意識向上による持続的な環境保全活動	http://k-umisakura.com/
(特非) 能登半島おらっちゃん里山海	石川県珠洲市	能登の「里海」文化の継承と保全	http://www.satoyama-satoumi.com/oraccha
(認特) 未来の荒川をつくる会	山梨県甲府市	名勝・昇仙峡から甲府市を縦貫する荒川及びその支流の河川清掃	http://www.mirainoarakawa.com
全国川ごみネットワーク	東京都江戸川区	水辺のごみ削減学習プログラムの構築と実践	http://kawagomi.jp/
(特非) 公益のふると創り鶴岡	山形県鶴岡市	鶴岡市内川流域の繁茂した藻刈りを市民参加型で実施する体制構築プロジェクト	http://k-tsuruoka.com



春

機械が入らない棚田の田植えは全て手作業で行われる



夏

オーナーは何度も棚田に足を運び、こまめに草刈りをする



秋

棚田一面が
黄金色に染まれば
慌ただしく
稲刈りが始まる



冬

かいまつ
松明とLEDで
美しくライトアップされる
棚田は冬の風物詩

棚田の 四季

「棚田は冬の間、同団体では、棚田に生息する動植物を間近に見られる「自然観察会」や、米作り、わら細工作りなどの「体験活動」を企画しています。授業の一環として学校単位での参加も多く、子どもを中心に年間約5000人が棚田を訪れています。事務局長の浅田大輔さんは「人が手を加えているからこそ、美しい景観や生態系が保たれているということを子どもたちに伝えたい。棚田での体験をひとつのきっかけとして、自分たちの暮らす地域の自然や環境問題にも興味をもってほしい」と話します。

四季折々の棚田の美しさや米作りの楽しさに魅了され、都会から棚田地域に移住する人も増えています。石田さんは「米作りを通して何度も棚田に足を運んでもらい、地域住民との交流を深めることで、地域の魅力を知ってほしい。地域の魅力とはそこに住む人々や自然環境など、元来からこの土地にあるもの。その地域資源をうまく活用して、棚田の魅力を伝える事業を企画していきたい」と展望を語ります。

里山の原風景を現代に残す 大山千枚田

棚田とは山の斜面や山間部の傾斜地に階段状につくられた水田です。山がちな日本ではかつて全国各地で見られましたが、現在では耕作放棄が進み、最盛期の半分ほどの数に減っているといわれています。今回は千葉県鴨川市にある大山千枚田にスポットをあて、棚田保全活動に関わる大山千枚田保存会にお話を伺いました。

里山の美しい原風景として、人々から親しまれている棚田ですが、一枚一枚の面積が小さく、傾斜地にあることから、労力のかかる条件不利地域とされています。1970年代ごろからの米の生産量を抑制する減反政策や、山間地域の過疎、高齢化などにより、棚田はまっさきに放棄されていきました。大山千枚田も同じです。大山千枚田には全部で375枚の水田があります。が、90年代には農家がわずか8軒にまで減少。高齢化も進み、そのままにしておけばいずれ消えゆく運命でした。そんな大山千枚田を守ろうと立ち上

がったのが、大山千枚田保存会理事長の石田三示さんです。きっかけは、都会から鴨川に移住した人の言葉だと石田さんは話します。「ここで生まれ育った自分にとっては、棚田はごく当たり前にあるもので、むしろ面倒な土地だから放棄されても仕方がないとすら思っていました。ところが移住してきた人に、棚田の景観が非常に素晴らしいと言われ、初めて棚田がこの地域の財産であり、美しい景観や田んぼとしての機能、豊かな生態系は、保存していくべきものだと感じたのです」

97年、石田さんは大山千枚田保存会を発足。2000年には全国でも先駆けて、空いている区画を貸し出し、オーナーとして田植えから収穫までの米作りを実施してもらう「棚田オーナー制度」をスタートさせました。「棚田を守りたい」という保存会の思いと、「自分で米作りをしてみたい、もっと自然と触れ合いたい」という都会に住む人々のニーズがマッチし、オーナーは順調に増加。今では棚田のオーナーと地域住民との間で、積極的な交流も行われています。「耕作地の放棄や高齢者の増加など、地域の課題を逆手にとり、今や棚田を大切な財産として活用



特定非営利活動法人

大山千枚田保存会

活動名

南房総地域における草地環境の生態系の把握とその多面的機能の普及啓発活動

千葉県鴨川市

<http://www.senmaida.com/index.php>



理事長
石田 三示さん



事務局長
浅田 大輔さん

大山千枚田保存会は、千葉県鴨川市にある大山千枚田の保全を目的に、さまざまな事業を展開している団体。棚田を貸し出す「棚田オーナー制度」を軸に、「自然観察会」や「体験活動」などの事業を実施。大山千枚田の魅力を伝えるとともに、地域全体の活性化に力を入れている。



自然観察会では、子どもから大人まで楽しめるプログラムを企画している。棚田にいる生き物も大切な財産。生態系を活用してさまざまな事業が行われる

ー ハブラシ回収プログラムの仕組み



「捨てる」という概念が存在しない未来を目指して

新しい製品を生み出す「マテリアルリサイクル」を指します。

同社は使用済みの製品を原料として新しい製品を生み出す「マテリアルリサイクル」を指します。

「マテリアルリサイクル」を
広め、ゴミのない世界に

同社マーケティング&コミュニケーション戦略パートナーシップのルーカスマユミさんは「諸外国と比べ、日本人のゴミ問題に対する意識は高い」と言います。その一方で「日本ではゴミを焼却する技術とシステムが根付き、リサイクル可能な資源までも焼却して埋め立ててしまっている」と課題も指摘します。

同社は使用済みの製品を原料として新しい製品を生み出す「マテリアルリサイクル」を指します。

企業情報

テラサイクルジャパン合同会社



テラサイクルジャパン合同会社は、リサイクルが困難な廃棄物を回収し、さまざまな新しい製品にリサイクルする事業を展開しています。

本社所在地 東京都目黒区
お問い合わせ先 0120-934-746
URL <https://www.terracycle.co.jp/>



学校へ出張授業に出向き、生徒と一緒にグループワークなどを行っている



左から片山亜沙美さん カワバタ エリックさん(アジア太平洋リージョナルマネジャー) ルーカス マユミさん



テラサイクルジャパン合同会社

テラサイクルジャパン合同会社は、企業と協働して従来ゴミとして捨てられている使用済みの製品やパッケージなどを回収し、新たな製品にリサイクルする事業を展開しています。今回は、現在、日本で進めている「ハブラシ回収プログラム」と「クルマ用消臭芳香剤リサイクルプロジェクト」を中心に、同社の理念や事業について伺いました。



コンセプトは「捨てるという概念を捨てよう」

テラサイクルジャパン合同会社(以下テラサイクル)は、2001年にアメリカで同社を創設したトム・ザツキー氏が掲げている「捨てるという概念を捨てよう」というコンセプトのもと、従来はゴミとして捨てられていたものを資源として回収し、付加価値のある新たな製品を生み出すリサイクル事業を展開しています。また、その回収量に応じて協力団体に「テラサイクルポイント」を付与しています。協力団体がそのポイントを活用することで、さらなる社会貢献につながる仕組みです。

取拠点は、現在、小中学校や歯科医院、ドラッグストアなど全国約320か所にのぼっています。特に小中学校の回収拠点は、同事業の広がり、の基盤となっており、「児童・生徒が簡単に楽しんで参加できるエコ活動」として、授業の一環で参加する学校も増えています。

また、回収協力団体には、回収した歯ブラシ1本につき、2円分の「テラサイクルポイント」を付与しています。このポイントは、任意のNPO団体などに寄付することができ、さまざまなリサイクル製品に交換することもできます。

クルマ用品を回収して、交通事故の減少に寄与

同プログラムでは、これまでに33万本のハブラシが回収されました。同社マーケティング&コミュニケーションマネージャーの片山亜沙美さんは同事業について「単なるリサイクル活動で終わるのではなく、子どもたちの未来につなげていく活動にしていきたい」と話します。

「環境教育としても広がる「ハブラシ回収プログラム」

テラサイクルでは、15年からライオン株式会社と協働し、「ハブラシ回収プログラム」をスタートさせました。誰もが使用するハブラシでのエコ活動は身近に感じやすく、手軽に参加できることが特徴です。同プログラムの回

第3回 全国ユース環境活動発表大会が開催されました！

「全国ユース環境活動発表大会」は、高校生の活動の充実、及び将来の活動ビジョンの具体化を支援することを目的に、高校生の環境活動を全国から募集し、活動成果を発表する機会を提供するものです。3回目となる今回は、全国から応募があった100校より選ばれた代表、12校が発表。次世代を担うユースの皆さんの環境保全への熱い思いが伝わってきました。特に優れた活動発表には環境大臣賞等が授与され、表彰式には笹川博義環境大臣政務官が出席し、挨拶をいただきました。

日程 2018年2月3日(土)、4日(日)

会場 国連大学ウ・タント国際会議場

主催 全国ユース環境活動発表大会実行委員会

(環境省／独立行政法人環境再生保全機構／国連大学サステイナビリティ高等研究所)

協力 環境省地方環境パートナーシップオフィス(EPO)／地球環境パートナーシッププラザ(GEOC)

ESD活動支援センター／全国大学生環境活動コンテスト実行委員会

協賛 キリン株式会社／協栄産業株式会社／SGホールディングス株式会社

三井住友海上火災保険株式会社



三井住友海上



地球環境基金のサポーター

地球環境基金をご支援くださった方々

地球環境基金に、平成30年1月から6月末までにご寄付・ご支援くださった方々は下記のリストのとおりです。個人や企業・団体としてご協力いただいた方はもちろん、さまざまなイベントを通じて募金活動にご参加・ご協力いただいた大勢の方々に深く御礼申し上げます。

平成30年1月から6月末日現在までに420件、総額**17,417,101円**のご支援をいただきました。ありがとうございました。

個人	企業	環境省
秋元 良一 浅井 豊司 浅見 富美子 アドバンスクラブ会長 田中 雄二 荒井 美樹 飯田 浩二 五十嵐 真由美 池亀 裕子 池野 弥生 石垣 京子 石田 操 石橋 司 市川 美智子 伊藤 文子 稲津 美香 井上 雅晴 井本 敦幸 岩田 サユ子 鶴沢 かよ子 内山 美紀 梅本 孝子 遠藤 すず子 オオエ リオ 大河原 和男 大澤 幸子 太田 雄介 岡野 香代子 岡野 誉大 岡野 美佐子 岡野 義幸 岡本 昇 荻野 智香子 奥富 伸子 小笠 幸子 小野寺 満代子 片岡 真一 加藤 勝彦 加藤 信幸 門畑 裕美子	成島 菜穂子 西澤 政幸 ニシムラ ジュンヤ 西山 哲夫 二村 文枝 羽佐間 勝子 橋本 由美子 馬場 徹 土生 亜紀子 樋口 美由樹 深田 セツ子 藤田 周一 フジワラ カズミ 舟田 均 星野 正明 堀 英樹 松本 大 道添 直也 湊 亮策 峯岸 喜代子 宮崎 裕司 宮下 裕美 森 仁司 森本 清子 谷地端 茜 山崎 あや 山崎 俊太郎 山崎 春生 吉岡 利枝 吉田 久由 吉田 実 吉田 寧 米田 高春 若林 園子 脇若 保雄 渡辺 弘二 渡部 博	浅香工業株式会社 株式会社朝日フィナンシャルグループ イーパートナーズ株式会社 有限会社インターリンク 株式会社エイチ・ツー・オーアセットマネジメント 株式会社NTTぷらら 株式会社木楽舎・ソコト編集部 株式会社J-WAVE 株式会社七豊物産 株式会社ジャパンクリエイト 新宿南エネルギーサービス株式会社 株式会社そごう・西武 ソニー銀行株式会社 事務統括部 有限会社第一環境 株式会社橋フォーサイトグループ テラサイクルジャパン合同会社 トータルゼータエンジニアリング株式会社 園田分室 西日本シティ銀行 職員組合 日本紙通商株式会社 阪急阪神ホールディングス株式会社 ファミリーマート 八王子甲州街道店 富士オフィス&ライフサービス株式会社 株式会社富士通エフサス ブックオフコーポレーション株式会社 ポケットカード株式会社 三菱UFJニコス株式会社 株式会社社宗平
		環境省 大臣官房総合環境政策総括官グループ環境経済課 環境省 大臣官房総合環境政策統括官グループ総合政策課 環境省 地球環境局総務課 環境省 水・大気環境局総務課 環境省 大臣官房秘書課 俱知安町役場 環境対策課 久御山町役場 環境保全課 東温市役所 市民福祉部環境保全課 中野区役所 環境部 那須塩原市役所 生活環境部環境管理課 南足柄市役所 環境課 妙高市役所 環境生活課あらい再資源センター 与那原町役場 住民課
		その他 特定非営利活動法人 青森県環境パートナーシップセンター 板橋区立エコポリスセンター エコライフ・フェア2018 NTT全国OB会 電友会五ツ橋クラブゴルフサークル 加古川市立東加古川公民館 一般社団法人全国燃料協会 学校法人玉川学園 地球環境イベント かながわエコ10フェスタ2018 東京農業大学 生活協同組合 一般社団法人日本釣用品工業会 公益財団法人山形美術館 ロハスフェスタ万博2018 (五十音順・敬称略)
		国・地方公共団体 射水市役所 小杉地区センター 大牟田市役所 大村市役所 環境保全課 春日部市役所 環境経済部環境政策推進課 環境省 環境事務次官・官房長 環境省 環境保健部石綿健康被害対策室 環境省 環境保健部環境保健企画管理課 環境省 自然環境局総務課

※このリストは、地球環境基金への振込通知書等に記載された名称・氏名に基づき作成しておりますので、個人および企業・団体等の区別につきまして必ずしも正確ではない場合があります。また、紙面の都合により、ご寄付・ご支援くださったすべての方々のお名前を掲載できない場合もございますので、ご了承ください。

■「地球環境基金便り第45号」 読者アンケートにご協力ください。

アンケートは、このページのアンケートはがき、およびホームページ「地球環境基金の情報館」のアンケートページ(<https://www.erca.go.jp/jfge/info/publicity/tayori/form/45.php>)において受け付けております。皆様のご意見・ご要望をお聞かせください。

PRESENT

アンケートにお答えいただいた方の中から抽選で10名様に、地球環境基金オリジナル・エコバッグをプレゼント(応募締切:平成31年2月末)。当選者の発表は、プレゼントの発送をもって代えさせていただきます。



■ ご寄付口座のご案内
「地球環境基金」へのご寄付は、下記口座より受け付けております。ゆうちょ銀行からのお振込みの手料は無料になります。

銀行名／支店名	口座番号	口座名称
ゆうちょ銀行	00190-664214	地球環境基金
新生銀行／本店	普通預金 0789699	独立行政法人 環境再生保全機構 地球環境基金
三井住友銀行／東京公務部	普通預金 3013615	
三菱UFJ銀行／本店	普通預金 7637448	
みずほ銀行／本店	普通預金 2413416	
りそな銀行／赤坂支店	普通預金 1023850	

①独立行政法人環境再生保全機構は、特定公益増進法人に指定されており、税制上の優遇措置を受けることができます。
②ゆうちょ銀行以外からの銀行からお振込みいただく場合は、領収書が発行できません。領収書の発行を希望される方は、お手数ですが、地球環境基金部 基金管理課(TEL:044-520-9606)へご連絡ください。

■この他にも、クレジットカードを利用したご寄付など、多様な寄付方法をご用意しています。詳しくはウェブサイトをご覧ください。
地球環境基金の情報館 <https://www.erca.go.jp/jfge/>

岩手県立遠野緑峰高等学校 草花研究班

ホップ和紙開発プロジェクト ～ホップ蔓の新たな可能性にかける～

全国屈指のホップの産地である遠野市で、廃棄されるホップの蔓から繊維を抽出し、化学薬品ゼロのホップ和紙を製作する工程や技術を向上させる研究を継続した。漂白剤を使わずにつくられた真っ白な和紙

は、「遠野物語」をイメージしたランプシェードや、地元小学校の卒業証書に使われている。またキリン株式会社の社員研修受入や、紙すき体験工房を開催するなど活動の普及にも努める。



愛知県立佐屋高等学校 羽ばたけコールドック農法研修班

世界最小のアヒル(コールドック)が 地球を救う！

アヒル農法はアヒルが成鳥になると大きすぎて田んぼに放せず、コストもかかることが課題だった。そこで、動物園や野鳥園を訪ねて見つけた世界最小のアヒル“コールドック”を活用。この農法で育てた米や、米

糠を使用した保湿クリームやボディソープを、地元のコンビニエンスストアで販売し、活動の普及を図った。今後は他の農産物でもコールドック農法を推進し、付加価値をつけた6次産業化に注力していく。



和歌山県立田辺高等学校 田辺中学高校生物部

鳥の巣半島の生物多様性を守ろう

田辺市にある鳥の巣半島の豊かな生物多様性を守るため、ため池に生息する外来生物アフリカツメガエルの駆除を実施。従来は水を抜いて目視できる個体だけを駆除していたが、泥に潜る個体が残存繁殖すると

いう課題があった。そこで水を抜いた後に細かい網を沈め、カエルが空気を吸いに上がってこれないように。この方法を実施したため池ではアフリカツメガエルの駆除に成功した。



「第4回全国ユース環境活動発表大会」2019年2月9日(土)、10日(日)開催決定！参加高校生募集中！